

『彼岸会』御案内

当山「順正寺」では、壇信徒の総霊位をまつり、仏恩報謝の念いをこめて、左記の通り「春季彼岸会法要」を厳修致します。

公私共御多忙とは存じますが、万障繰合せの上御参詣下さいます様、お願い致します。

記

二月一十二日（火）

「結願の日」

午後一時より

法説経 法話 おととき

以上

◎御自宅で読経を御希望の方はお電話下さい。

彼岸入り 三月 十七日（水）

お中日 三月 二十日（土）春分の日

結願 三月二十三日（火）

◎寺へ御遺骨をお預けの方は、彼岸中に必ず御参詣下さい。

尚、二十日（春分の日）・二十一日（日曜日）に御参詣いただければ、読経供養致します。

順正寺 住職 江口 貫照

◆『彼岸』の意義について。

「彼岸」とは、日本固有の風習であります。この風習は、古来より伝わり、今日まで生き続けてきたものであり、本来は「至彼岸」のこと、つまり、「彼岸に至る」ことを言います。ここでいう「彼岸」とは、極楽浄土・彌陀世界のことであり、そこまで辿り着くことをいうわけです。ただし、そこまでには、難渡海（渡り難き海）があり、自力にて辿り着けるものではなく、その海を越え、全ての者を岸まで導くのが「彌陀の本願」なのです。例えれば、「彌陀の本願」とは、「難渡海を渡る大船」といえるものです。ゆえに、彼岸とは亡き人の徳をしのびつつ、その誘いにより「彼岸」を慕い、彌陀の大船に乗じて救われていかんと発心する場にあります。「彼岸」に至るまで、末法濁世に生きる我々には多くの苦しみが有ります。その世の中で生をまっとうしていくことを願っているのが、仏様であり、阿彌陀様であります。そこに、真に気付いていく機会として、「彼岸」という一つの風習が今日まで根付いてきたのであります。

鳴海家の十年

鳴海 昭純

わが家には、二人のおとな。それから三人のこどもがいる。おとなは、三十代なかばの男（私）と、三十代前半の女（妻）。こどもは、小学校二年生の男の子。幼稚園年長の男の子。満一歳になったばかりの男の子。

思い返せば、わが家の歴史は昭和五十八年十月の結婚式より始まった。たくさんの人に祝福されながら（一方では危ぶられながら？）なんとかスタートする事ができた。翌年には長男の誕生。夫婦で右も左もわからぬままの子育てで大奮闘。

育児もようやく落ち着いて、さあこれからは・・・と思いきや、次男懐妊の朗報。そして出産。また子育てのやり直し。

「もう育児はいいよね」といいながら、昨年三男誕生。「また男」という思いを隠し、紙おむつを買いに走る。

そうこうしながら気が付いてみると、はや十年を数えようとしている。この十年間で、

わが家は、非常ににぎやかになった。二階で長男と次男の大喧嘩。それを叱る声。よちよち歩きの三男のおもちゃ投げ。それを片付ける音。言葉をかえて言うなら、騒々しい。

しかし、考えてみればこれらの騒々しい音は、どれひとつをも欠くことのできない音である。わが家の大切な音である。ときどき長男と次男が、順正寺で「お泊まり会」をする。その夜の静けさは、それはもう筆舌に尽くし難いものがある。「たまにはこんな静かな夜もいいもんだね」といいながら、無意識にテレビの音声をあげている。なにか間の抜けた時間が過ぎていく。わが家にいるような気がしない。やっぱり騒々しさがあってこそ「わが家」である。

わが家の騒々しさは、長男の出産時よりはじまった。陣痛がきて産科の先生に「今夜にも生まれる」と告げられ入院。今か今かと待つがなかなか生れない。翌日病院へ様子を見に行く、陣痛が微弱で促進剤を使って夜に再挑戦とのこと。しかし、大きな陣痛がこな

くて生れない。そうこうしている内に、一旦、自宅へ帰された。後日再び再入院。しかし、大きな陣痛はやってこない。後から入院した妊婦さんが、「おさきに……」と言うように廊下を歩いている。「また帰されるかな」と思った日の夜、「元気な男の子ですよ。母子ともに元気です。」と病院からの電話。急ぎ駆けつけてみると、わが家の宇宙人第一号は、「出産の騒動われ関せず」というような顔をしてスヤスヤと眠っている。母親はというと、「あまりの辛さに死ぬかと思った」とのこと。その死ぬほどの辛さというものは、とても想像がつかないし、恐らくは世の男ども全てが、「そんなもの味わいたくもない」と思っているだろう。命懸けの出産に敬意を表すと共に、わが家の「騒々しき誕生」に深く感謝する。

次男の出産時には、夜、長男が自分の鼻の中へおもちゃを入れてしまつて、取れなくなつたことに気付き、救急病院へつれていき、その深夜に陣痛がきて入院、出産。

なかなか生れてこなかつたのは長男だけで

はなく、次男も三男も陣痛微弱であつた。それだけに、その都度大騒動。

しかしながら、出産の騒動はわが家だけでは決してないであろう。身近なところでは、我が両親。長男である私が生まれたときは、やはり大騒動であつたろう。また、妻の生まれたときもやはり、大騒動であつたろう。

「人は子供を持って親の苦労がわかる」とは、よく言つたものだ。わが家の騒々しさの中で、少しは我が両親の苦労が、理解できたように思う。子供に熱があれば、その体調を夫婦して気遣い、喧嘩して帰れば、その様子を気遣う。我が両親もやはりそうしてきてくれたのだ。成人し、親となつた今でもなお、気遣い続けてくれている親がいる。その親の憶いは、私を通してやがては我が子に伝わるだろう。そして、そのまた子に……。

わが家の騒々しさは、まだまだ続く。まだまだ、わが家の大切な音は続くことだろう。

白 然 江口 智流

ぼくが嫌いなものは争いです

争いを起こすような人とは戦います

ぼくが嫌いなものは差別です

差別をするような人とはぼくは違っています

ぼくが嫌いなものは欲望です

欲望がなくなればと何時も欲して望みます

ぼくが嫌いなものは我執です

自分勝手な人には意見して言い聞かせます

ぼくが.....が、それこそが私なのです。

——真宗会館「日曜講演」の御案内——

来る、四月十八日（日）午前十時より、

東本願寺『真宗会館』の日曜礼拝において、

当順正寺住職江口貫照が講演を致します。

ぜひ、お誘い合わせの上、御参詣下さりませようお願いします。

◎日時・四月十八日（日）午前十時

◎場所・真宗会館（練馬区谷原1の3の7）

西武池袋線練馬駅南口下車↓西武バス

（成増町行）高松三丁目下車↓徒歩一分

『白色白光の△△』御案内

三月の白色白光の会は、左記の通り執り行ないます。

◎日時・三月十六日（火）午後一時ヨリ

◎会処・順正寺本堂

会では常時会員を募集しています。皆で語り合い、学び会っていく楽しい会です。

詳しいことは当寺までお尋ねください。

鳴海 昭純：石川県珠洲市 高源寺 副住職。

私の義兄。姉の旦那様で、寺の行事の場に何時も一緒に

出仕しているチビさん（純香・心光）二人と、まだ出仕

はしていませんが、三男の玲瑛のパパに当たる方な訳で

す。現在は築地本願寺和田堀廟所に勤務なさっています。

少し話します。先日、我が家の梅の木にウグイスのつ

がいが戯れていました。何故ウグイスだと解ったか。や

っぱり梅にウグイス、そう思いたかったからです。同じ

ように、つがいのほうがオス二羽・メス二羽よりもいい

など私は思えたのです。物事をどう取るかは、自分次第

ですね。気持ち良く受け止めたいのです。△口嘗手

◎177 東京都練馬区石神井町3の17の4

03 (3996) 2064

順正寺